

野バラの咲く村

小城ゆり子

一 イバラソネ
茨曾根

私の故郷、新潟県の茨曾根村。「茨曾根」とは、どういう意味か？

辞書を引くと、「茨」とは、トゲのある野生植物の総称で、たとえばノバラ、カラタチのことをいう、とある。

では、「曾根」というのは、どういう意味か？ 亡くなった父は、「ソネ」とはアイヌ語で「沼」という意味だ、と言っていた。確かにこの辺は水が多く、昔、沼だった、と考えるのはごく自然である。しかし、アイヌ語辞典で調べてみると、ソネとは、「なんとか」「間違はなく」という意味で、「沼」とはまったく関係がない。

日本語の地名事典には、「ソネ」とは、古語で、石が多くて地味のやせた土地、という意味だと載っている。さらに調べてみると、ソネは「曾根」とも書くそうだ。開墾される前、茨曾根はごっこつした石ころだらけの、荒れた土地だったのだろう。

その昔、谷川村から出た谷川様が、茨曾根といわれるこの土地を開墾し、富裕なこの村を作った、と父は言っていた。

ここは中ノ口川のほとり、今は富裕な農村、日本一の米作地帯である。

菅原道真の子孫と称する谷川村の老百姓、谷川家の次郎と三郎は、この中ノ口川のほとりに来、ここを開墾し、大きな村を作った。農民たちも大勢やって来て、ここで米作りに励む。首尾良く米が収穫されるまでの皆の生活費は、谷川村の本家が出した。

谷川次郎は上の旦那様、三郎は下の旦那様と呼ばれる。川の上流が上茨、下流が下茨である。

明治の頃、私たちの祖父にあたる谷川虎造は、下茨の旦那様の家に次男として生まれ、西洋医学を学んで、医者になった。

で、兄が早くに亡くなったので、兄の娘を育て、その姪に婿養子を迎えてやり、「おらも、ひとつ、ここで婿養子に行くべえ」と考えた。というのは、彼は親戚のお嬢様方を次々と嫁として押しつけられ、気に入らないので次々とすぐに離縁して、ただ一人愛した妻が

いたが、彼女は産後のひだちが悪く、赤子と一緒に亡くなっていたのである。で、彼はこのとき、独身だった。

そこで彼は、ちょうど上の旦那様の家に、美しい未亡人がいたので、ちゃっかりその婿養子におさまった。

が、根が変わり者の虎造に、養子勤めが勤まるはずもない。産まれた女の子一人と妻を残して、彼は旅に出た。

彼は医者なので、全国どこへ行っても、医院が開業でき、生活できた。しかし彼はどこにも安住の地を見付けることができなかった。

新しい妻子を連れて茨曾根村に帰って来たときは、親たちが村の清水という部落に一軒、家を作ってくれた。ここで、開業するように、という意味である。

清水。井戸を掘ると、良い水が出るので、清水と名付けられたこの土地。後にここが私たち一家の住居になる。

それはそれとして、虎造のお話を続けよう。

親の気持ちもわからないではないが、もともとが放浪癖のある虎造である。医師として村の人々に責任を持ち、自分の持ち場で人々に貢献するという考えなどなく、清水にも落ち着かず、新潟市近郊の曾野木というところに引越し、開業し、医者の不養生のため、脳卒中で亡くなった。

彼はなかなかの変わり者で、名医のだが、別に出世欲はない。あるとき、知人が、「お前さん、御殿医にならんかの？」と華族様の御殿医にならないかという話を持ってきた。が、彼は即座に、「いんや、御殿医なんかになったら、屁がこけねえ」と断った。笑い話であるが。

虎造の長男、つまり私の父、谷川義男は、医者にはなれなかった。彼は繊細な神経の持ち主で、高等学校時代、動物の解剖が恐ろしく、医科大学では人の屍体の解剖が必修科目なので、それを考えるだに恐ろしく、とてもそれに耐えられそうになかった。で、医科大学入学はあきらめるほかなかったのだ。それで次男である弟が、医者になる。

教師になった父は、同じく教師の美千代と結婚。三人の娘が産まれた。私は次女である。東京に出ていた我が家は、戦争の時、空襲を逃れて、郷里の曾野木に疎開した。戦後、父はそこで新潟師範学校の教師になり、祖母、伯母、叔母、叔父、叔父の妻、父、母、そして私たち三人姉妹という大家族となる。

父が戦後のレッドパージ（赤狩り）で教育界を追われ、母が清水の近くの月潟村の中学

校教師になれたので、私たちはそれまで無人だった清水の家に引っ越した。今度は、父、母、叔母、私、妹の五大家族である。

曾野木の家を取り仕切っている伯母は、共働きの父母に「留守番のため」叔母を押しつけ、父母の長女（私たちの姉）を自分のそばに奪い取った。「谷川家の跡継ぎにするため」だそうだ。

姉は、妹の私が言うとき身びいきになるが、明るい、人なつっこい性格で、誰からも愛され、どんな境遇になっても周囲に受け入れてもらえ、自分もその人たちになじむ、得な性分の少女だった。父母が恋しいと泣いたりしないのだ。

いなかの学校が農繁期休みになると、姉は清水の家に来て、そのときだけ、私たち三人姉妹は、一緒に遊べた。

ここでいう「農繁期休み」というのは、春の田植え、秋の収穫のとき、一週間だけ学校を休みにし、農家の子供たちに家の手伝いをやらせるのである。もちろん農家の子供たちは、ふだんも家の手伝いをやらされていたのだが、田植えと収穫のときは、学業はなしになるのだ。

ところで、お話を元に戻して、私たち一家に付いてきた叔母のことであるが、彼女はとても不思議な人だった。

毎日いつも自分の部屋に閉じこもってトイレのときしか出て来ない。食事も家族と一緒にとらず、母がいないとき、バタバタと台所に来て、どんぶり飯と菜っ葉の油炒めを食べる。引きこもりの元祖か？ 家事は何もせず、役に立たない。父は「留守番ができる」とかばって言ったが、母は「留守番もできない」と怒っていたようだ。それでも、妹がまだ幼く、当時は近くに保育所もなかったので、妹一人を残して勤めに出なくてはならなかった母にとっては、やはりこの叔母も必要な存在ではあった。

教育界を追われた父は、博物館の発明相談係りをやっていた。後に近くの三条市の高校に勤められるようになるまで。

ここで父の遭った「レッドパージ」について、簡単に説明しておく、これは、朝鮮戦争の頃、GHQ（連合国総司令部）最高司令官マッカーサーが、すべての共産主義者、それに同調する者、果てはリベラルな自由主義者までを含めて、公職から追放した事件のことである。当時、日本は戦争に負けて、GHQに支配されていた。

二 中ノ口川

中ノ口川は、信濃川の分流である。燕市付近で信濃川から分かれ、新潟市の河口付近でまた信濃川と合流して、日本海にそそぐ。

これは、信濃川が始終洪水を引き起こしているの、治水工事として、上杉謙信が家臣の直江氏に命じて、信濃川から分流を開削し、このため初めはこの川は直江川と呼ばれ、後に中ノ口川と呼ばれるようになったという。が、これは確かな史実ではない。

中ノ口川は、流長約三五kmの長い川で、川幅も広く、水位も深い。このような大きな川を、上杉謙信の時代にはたして開削できたものだろうか？ これは大きな疑問のあるところである。

が、信濃川の治水は、どうしても必要だった。信濃川も中ノ口川も、始終、年中行事のように洪水を引き起こしている。ただ、流域が諸藩に分かれているので、諸藩が一致団結して治水工事にあたる、というわけにはいかなかった。それでも江戸時代から、大河津分水の計画がなされ、紆余曲折を経て、ようやく大正時代に現在の分水ができあがったのだ。

これは、信濃川が最も日本海に接近する大河津から運河を引いて、大雨などで信濃川の水かさが増すと、水門を開き、増水した水を日本海に流す、というものである。これができて、蒲原地域の洪水は少なくなった。

しかし、大正時代の技術をもって、やっと大河津分水ができたのに、これよりもっと大きく、長い中ノ口川が、戦国時代に造られた運河であったとは、信じがたい。

信濃川も中ノ口川も、始終、洪水を引き起こしている暴れ川だった。大河津分水ができからは、よほど良くなったのだが、それでも、洪水は起こった。

私がまだ中学生のとき、つまり昭和三十年代のことであるが、台風による大雨で、白根の土手が崩れかかった。白根町は茨曾根村のすぐ隣の町である。その中ノ口川の土手が崩れかかった。今にも水が町を襲ってくる……と、白根の青年たちは、町の米倉を開け、そこに保管してあった、収穫したばかりの米を、俵ごと、土囊がわりに土手に築いた。

台風が去って、大雨が止んだとき、人々の意見は、二つに分かれた。

青年たちの行為を「良し」とする声。その反対に、大切な米を土囊代わりに土手に積み上げてしまった、と惜しむ声。二派に分かれた。

これは、日本一の豊かな米作地帯だからこそ成立した話であろう。

この中ノ口川と信濃川とにかこまれた土地を、中蒲原郡という。この辺りの越後平野一

帯を蒲原平野というのだ。

中蒲原郡茨曾根村と、中ノ口川をへだてて、西蒲原郡月潟村がある。私の母は、この月潟村の中学校に勤めていた。

月潟村は、有名な越後獅子発祥の地。

越後獅子というのは、江戸時代、子供たちや若者たちが江戸へ出て、家々をまわって曲芸のような舞踊を見せたのをいう。

また、ここは芸者を抱えた花街でもあった。

そしてまた、江戸時代から、この村の青年たちには、江戸に行き、銭湯に勤める者が多かった。今でも東京方面の銭湯は、月潟村の出身者で作られたものが多いという。

川は、橋がなければ、渡れない。月潟の橋は、木製で、少し怖い。茨曾根の清水の橋は、頑丈な橋だった。石で作られているのか、あるいは鉄筋コンクリートか。私はこの橋がお気に入りだった。名前を両郡橋という。

両郡橋のたもとに、三軒の店があった。そのうち、一軒の小林商店には、くりくり目玉のほったの赤い少女、千代子ちゃんがいた。小林商店のマスコットガール千代子ちゃん。性格も素直なので、村の人々皆に好かれていた。

その子が、両郡橋上を自転車で行中、トラックにひかれた。

ここは無医村ではないが、交通事故の外科手術のできる医者や医療機関はなかった。トラックの運転手は、あわてて千代子ちゃんを新潟市の大学病院に運んだが、彼女は出血多量で亡くなった。村の人々は、皆、悲しんだ。

千代子ちゃんと何の関係もない私の母まで、悲しんだ。「子供が亡くなると、みんな、ああ、良い子だったんに、って言うけど、あの子はほんとに良い子だったがね」と言っていた。

交通事故に遭ったのが、千代子ちゃんではなくて、私だったら、どうなるか……村の人たちはどう言うだろう？ 私は皆に好かれている良い子ではなかった。

中ノ口川は、私にとって、母なる川だった。中学生の頃、夕暮れ時、私はよくこの川の土手を歩いた。

川の水は、土の色をしていた。美しい青い川ではない。上流の土地の恵みをいっぱい運んで来る泥の川だった。それが、私には気に入らない。青い川だったらいいのに……と、いつも思っていた。

土手を降りていくと、野バラがいっぱい咲いていた。開墾された土地には、野バラはも

うない。川のほとりにだけ、それは残っていた。茨曹根の名の由来である。

川の流れているところまで降りていって、私は、この水がきれいだったらいいのに、そうしたらこの流れに引き込まれて、水死してもいいのに……と思った。泥の川に引き込まれるのは、少しもロマンチックではない。こんなところに引き込まれて死ぬわけにはいかなかった。その頃、自分は業病になるのではないか、とノイローゼになりかかっていた私は、川の水が泥色のため、自殺できなかった。

三 早春賦

私は身体の弱い子だった。冬になると、発熱して、寝込んでしまう。毎年の年中行事だったが、小学校四年のときは、ただの風邪にとどまらず、肺炎を起こしてしまった。

高熱が下がらないので、近所の林先生リンという朝鮮人の医師が、「今は良い薬がありますんで」と、私の足にストレプトマイシンを注射した。これはペニシリンよりも高性能の抗生物質だという。

これを注射してもらって、熱は下がったが、私の歩き方がおかしくなった。女の子なのに、外股で歩く。不安がる母に、林先生は、「大丈夫ですよ」と取り合わなかった。

私はこの歩き方で、これまで三回、人に侮られた。

一回目は、肺炎が治って出ていった小学校で、級友が笑った。

二回目は、大学を出て就職した会社をクビになったとき、上司に「君のように歩き方がおかしいと、皆が、あれ、へんだな、と思うんだ」と言われた。

三回目は、教師を辞めるとき、同僚の体育教師に、「歩き方を直せ」と要求された。

長い人生で、三回言われるのは、仕方がないか。それに、私の歩き方がおかしいのは、もともとそうだったのか、それとも母の言うようにストレプトマイシンのせいかわからないのだ。

話を元に戻そう。

林先生は、在日朝鮮人で、夫婦で医者をやっていた。この辺りは医者が少ないので、朝鮮人を差別している人たちも、この先生にかかっていた。が、この先生を信頼できない母は、どうやら少し元気になった私を、白根の町の医者に連れて行った。白根はこの辺りの元締めみたいな町だった。

「ああ、あれえ、これは……」私を診察した医師は、ため息をついた。

「これは……ひでえ……もうひでえ扁桃炎だてえ、新潟市の大学病院に連れていきなせえ」

仕方なく、母は勤め先を休んで、私を大学病院に連れていってくれた。そこで、手術のため、一週間は入院することになった。実際には左右二つある扁桃のうち、「ああ、これはひどい」と、一度で二つ手術することができず、左右別々に手術することになって、二週間入院することになったが。

入院といっても、この頃は、まだ食糧事情が悪く、病院では食事はでなかった。食事は付添人が各自、コンロを持ち込んで、作るようになっていた。母の仕事は大変だった。

病室は大部屋だったので、何人も患者が入っていた。私のベットと向かい合った隣のベットに、少年が寝ていた。いつも寝て、私の方を見ている。かわいそうな少年……助けてあげられないのかなあ、私は同情して、そしてちょっぴり甘酸っぱい思慕も芽生えた。

ある日、少年は、治っていないのに、退院した。「良くなったんだ」と言った私に、母が言った「いや、もう終わりだで、家に返すんだろ」。私は悲しかった。

その後、そのベットには、丸顔の中年男が、来た。私は、その男には別に興味はなかったが、彼のところに毎日来る美しい芸者さんに興味を持った。

興味というか、あこがれみたいなもの。美しい人は好きだった。

廊下を歩いていたら、その人が来た。ぼつーと見上げる私に、彼女はほほえみ、笑った。

一度、以前、父の友人たちが我が家にやって来たことがある。そのうちの美しい奥さん。彼女が、私を見舞いに来てくれた。私はうれしくてならなかった。

小学四年生。私の中に、早春が始まっていた。

「青き川の流れ」という題名しかない私の小説。あるいは、「ある文学少女の軌跡」とも名付けた。題ばかりで、本文が書き進められない。

小さい頃から、私は、本が好きで、紙に何か書くのが好きだった。小学校に入る少し前、家にあった紙の裏にいたずら書きして、それが父の大切にしている書類だなんて、知らなかった。

父が、あれがない、と困って探し始め、母が私の所からその書類を探し出した。

今度、紙がほしかったら、ちゃんと紙をくださいと言うんだよ」と、母は、叱られると思っ**て**びくびくしている私に、言った。

「紙をムダにする」と、曾野木から偵察に来た伯母が文句を言う。

「紙くらい、ムダにしたっていいじゃありませんか」と母は笑って取り合わなかった。

私は、本を読むのが、大好きだった。家には、大人の読む文学全集、世界の地理百科、果ては発禁本まであった。マルクス主義者の父は、それらを大事に持っていた。そして、父は私にソ連の作家たちの書いた児童文学の本は惜しげもなく買ってくれたので、私は、それらを読んで、社会主義国ソ連にあこがれた。

その他、私は、そこは子供のころ、大人の本より、少女小説が好きだった。お小遣いを貯めて、ジュニア小説の本を買う。愛読書は、「アンネの日記」と「あしながおじさん」。雑誌は、「少女クラブ」や「女学生の友」をとって、夢中で読んだ。

そこに載っている少女小説をまねて、自分も小説を書いていて、自分で何冊も雑誌を作り、それぞれに連載小説を書いていて、

「売れっ子でもないのに、あちこち掛け持ちしなくたって」と、姉に笑われた。

私はその頃、いったいどういう小説を書いていたのだろうか……自分は父と母の本当の子ではなく、本当の親はどこかにいる……きっと本当の親は、もっと金持ちで、やさしい人なのだ。何か事情があって、私はここにもらわれてきたのだ……というようなことを書いていた。

子供というのは、よく自分の親は本当はどこかにいて、金持ちなのだ、と思うらしい、と聞いたことがある。別に、どの子たちもそうであるとは思わないが、私はそういう空想にひたっていた。

自分の勉強ばかりして、遊んでくれない父親。仕事と家事の両立に苦しんで、キリキリ舞いし、いつもヒステリー気味の母。私は東京の叔母（母の妹）の家に行きたかった、養女になりたかった。

東京に行きたい……と言ったら、母に叱られた。「おめえが東京に行く意味などねえじやねえか」と、相手にされなかった。

いつもやさしい叔母の所に行きたい……でも、私は、業病だから、行っても迷惑かけるだけかもしれない……と、あきらめた。

四 業病

谷川家の墓地は、うっそうとした木々に囲まれた、草ぼうぼうの古い墓地だった。そこへ、毎年お盆になると、私たちは一家そろってお参りに行っていた。親類縁者の埋葬されている一族の墓地である。

あるとき、私が中学校に入った頃、そこに新しい墓が建てられていた。それを見て、父と伯母が、ひそひそ話をしていた。

「誰の墓なんけ？」

私が聞いても、誰も教えてくれない。子供が聞いてはいけない話のようだった。

家に帰ってから、母が、暗い表情で、声をひそめて言った。

「あのお墓の人は、本家の人で、ハンセン病になったんだ。本家へ婿に来た人の実家に患者がいて、その人からうつったんだ。本家では、その患者に金を付けて、療養所に追いやってたんよ」

ハンセン病って、何だろう？ 私の中に不安が生まれた。

母が、

「ハンセン病が怖い、怖い」

と毎日騒ぎたてるようになった。

勤めていた学校で、同僚からこの病気のことを聞き、恐ろしくなったのだという。

教師仲間の文芸誌に、この病気にかかって療養所に入れられてしまう青年のことが、載っていた。母は、これを読み、

「この本にさわっただけで、ハンセン病がうつりそうなんだよ」とぶるぶる震えながら言う。

母の同僚が言うには、昔、山に登ったら、山中に奇妙な部落があって、鼻の欠けた大人たちが遠くから無表情でこちらを見ている。子供たちも、鼻の欠けた変な顔つきで、登山者が

「お菓子をあげよう」

と言っても、受け取るうともせず、奇妙な表情のままだったとか。

そして、母はなおも続ける。

「一つ目小僧とか、のっぺらぼうとか、あれはきつとハンセン病患者なんだね」

私がちよっと変わった絵を描きたくて、絵の中の人物に目鼻を付けなかったら、母が、

「ハンセン病患者の絵じゃないかー！」

ぶるぶる恐怖に震えて言った。

その母の病気が私に感染してしまう。

ハンセン病にかかったら、どうしよう、ああ、私はハンセン病になるんだ、どうしよう、親にも姉妹にも迷惑をかけて、強制療養所送りになるんだ、体は菌にむしばまれ、生きながら体が少しづつ、腐っていく……

私は手足に赤い斑点ができた。眉毛が一本、一本、抜け落ちてきた。指先の感覚も鈍くなった。こうして私はハンセン病になっていくのだ……

真実はどうだったのか？

ハンセン病はそんな恐ろしい病気ではなかった。体が生きながら少しづつ腐っていくなどということはなく、薬を投与すれば全快する。伝染性も、強いものではない。社会の差別と偏見が恐怖症を生み、国家権力が患者を強制療養所に隔離したのだ。国家の間違いは、何十年もの後、政府が謝罪した。

しかし、当時の私は、この恐怖症で、苦しくて、ひどい頭痛が続き、耐えられなかった。村の医者に行っても、

「勉強のしすぎだ」

と、とりあってももらえなかった。

勉強のしすぎとは……勉強しすぎると、頭が痛くなるのだろうか？ 私には、そんなことはわからない。私の場合は、受験勉強に没頭しているときだけ、この恐怖から逃れることができたのだ。

高校二年のとき、思いあまって担任の教師に必死で訴えたのに、「それで、君は受験勉強の間だけは、その悩みから逃れられるんけ？」と聞かれ、うなずいたら、

「それなら一生懸命勉強するこったね」

と片づけられてしまった。

私はそのとき誰か大人に精神病院に連れて行ってほしかったのに。

中学一年のとき始まったこの恐怖症は、高校二年まで続いた。一生涯どこまでも続くと思われたのだが、一応、高三のとき、嵐は去った。

それは受験勉強に励んだことと、男子生徒たちにあこがれて、あの人はどう、この人はどう、と勝手に考えて遊んでいたことによる。青春は苦悩を生み、愛も生む。

母は、谷川家のことを嫌っていたようで、特に伯母の雪代のごことは文句を言っていた。「雪代伯母さんは、いい人だ」と言う。「いい人」という言葉が、ここでは逆の意味にされている。そして、母はなおも次女の私のことを「雪代伯母さんにそっくりだ」と非難する。「おら、伯母さんたちのことがわかっていたら、パパと結婚なんかしなかったんだ」とまで言う。

伯母はお人好しだが、繊細なところはない。師範学校を出てから、小学校の教師となり、弟たちの学費を稼いで、婚期を逸した。

それでも、結婚の話はあったのだが、いつも彼女は、「おらはもういいすけ、妹の京子をお嫁にやっつくんなせえ」と言う。彼女は、家事をしない変わり者の叔母、京子のごことを、結婚もできないで……と不憫に思っていた。

伯母は、何といっても谷川家の血筋が大事。外から来た嫁は、他人と思っていた。

医者になった叔父、秀介に子供がなかった。それで、「秀介の財産を嫁に取られる」と危機感を持った雪代は、弟晴男の二人の娘をかわるがわる秀介夫婦に押しつけ、なんとか養女にさせようと画策したが、うまくいかない。

ずっと後になってからのことだが、雪代は、父虎造の血を引く医師、山田二郎を捜し出し、むりやり秀介の養子にした。三郎は、虎造が上の旦那様の家に婿養子に行ったときにできた娘の孫にあたる。

彼らの曾祖父が、私たちの祖父にあたる。これは、虎造があちこちで何回も結婚したために、こういうことが起こったのである。

山田三郎は、谷川秀介の養子になったが、それ以上のことはなく、結局、養父母と同居することもなく、秀介の開業した医院を継ぐこともなかった。

「雪代伯母様って、谷川家のことばっかり大事なんだね」と妹が笑った。「自分も、一度くらい、嫁に行けば良かったんにね」と私も同調した。伯母は、クラシック音楽が好きで、それはかまわないのだが、「おら、高尚な音楽が好きだて」などと言う。「高尚な」という言葉が、私は嫌だった。

この伯母と母とは、姉のごことで水面下で戦っていた。そして、いくら伯母ががんばっても、姉の母親は母であった。勝利は目に見えていた。母は、姉が中学を卒業したとき、がんばって伯母から姉を奪いかえした。姉は、嫌がりもせず、すんなり私たちの清水の家に帰ってきた。

曾野木では、この姉のボーイフレンド、小林力也が、新潟高校にトップ合格していた。この子はすごく優秀なので、伯母たちは、彼を医者にし、姉を薬剤師にして、結婚させ、自分たちはこの二人にぶらさがって生きよう、と計画していたので、これを母が怒ったのである。

私と妹は、姉が戻って来てくれたので、うれしかった。なんといっても、姉妹である。父も高校の教師となることができ、父母の共働きで生活はうるおっていたはずだったが、なぜか母は「うちは貧乏だ、貧乏だ」とぶつぶつ言っていた。「おらたちだって、食わなくてもいいのなら、金持ちになれるんだのに」とも言っていた。

「百姓は税金をごまかしている。おらたち勤め人は、一円も税金、ごまかすことができねえのに」

「百姓は、一年のうち、半年しか働かねえ」と文句を言う。

ここは雪国であるから、雪の積もっている間は、農作業はできない。冬、友人たちの家では、大人たちが土間で縄ないをやっていた。米を収穫した後のわらを縄にし、米俵を作っていた。みんな、働いているのに……と、私は思っていた。

税金のことだって、「税金をごまかせない」とは、子供たちに言うべき言葉ではないと思う。教育上、良くないではないか。

私の母は、「立派な方だ」と皆に尊敬されていたが、家庭内では文句ばかり言い、ヒステリー気味だった。男性と同じように働かされ、家事も育児もすべてやらされて、いつも疲れていた。

六 初恋

同級生たちにいじめられ、ひっこみじあんの暗い子だった私だが、思春期に入ってから、元気に明るくしようと努め、それはある程度成功した。

小学校五年で、初潮を迎える。

女になった……とは、どういうことか？ 毎月の血潮の訪れは、やっかいで憂鬱だった。学校の校門のところに、たきぎを背負って読書している二宮金次郎の銅像がある。その台座に腰掛けて、私は友だちの稲子と話していた。

「生理なんて、嫌だの」と、稲子が言う。「こんなもんなかったら、どげん気持ちいいか」

「おらは、嫌なことばっかしてねえよ」と、私は言う。血潮の訪れは、遠い昔のイザナミの命を、思い出させる。海からひたひたと、光に乗って、命がやってくる。いのちをはぐくむのは、女の特権なのだ。太古の昔から未来へとつなぐいのちの訪れ。

「なして生理が嫌でねえの？」稲子には、わからない。

「そうじゃねえて、嫌だけれど、もうちよつと違うこともあるすけ」

「何があるんね？」

「うんにや、それが何かはわからねえけれど、でも、とっても幸せな気持ちになれるんだ」

「」

「ぶーん」

校舎の二階の教室の窓が開いた。そこで若い女教師市田先生が、私たちを見て、にっこりほえんでいた。

初恋の季節が、まもなくやって来る。

中学校二年の春、私たちの学校に一人の転校生が来た。川村武くん。新潟市に住んでいたが、両親が交通事故で亡くなり、一人いた姉も家出してしまったので、彼と妹と二人、親戚である茨曾根の農家、川村家に引き取られたという。暗い眼をした、寡黙な少年だった。

彼は絵が上手だった。学校の成績は、上でも下でもないが、美術だけは抜群だった。風景画でも、彼の描いたものを見ると、心がそこに引き込まれそうになる……彼の悲しい気持ちが、よく理解できる。

交通事故の補償金は、やっかいになっている親戚に取られてしまったのだろう。彼は、作男として親戚で働かされ、中学を卒業しても、他のところに就職することも許されていなかった。学校では、中学二年から英語が選択科目になり、高校を受験する者や特に希望する者だけが教えてもらえる。武は英語を選択できず、将来働きながら定時制高校に通う自由も奪われていた。

私がノートに英文を書いていると、彼がそれを肩越しにのぞきこんで、「ああ、おれはもう、英語わからねえなあ」とつぶやいた。彼は中学校で一年間しか英語に接していない。気の毒だなあ……と、私は同情した。

ある日、美術の時間、先生が「男子は女子の、女子は男子の絵を描きなさい」と指示した。

私は迷わず、武の方に机を向け、彼の絵を描き始めた。すると、彼も、私の方を見て私の肖像画を描き始めた。描き終わって、教師に渡し、返してもらったら、二人で交換すればよかった……とは、後で私の思ったことである。

同情が恋にかわっていく。

武に話しかけたいのに、それができない。話しかける勇気がない。

そして、別れの日がやってくる。中学校卒業である。

卒業式の日、式が終わって、帰るとき、武がじっと私を見つめていた。私も彼を見つめて……でも、学校から去った。

高校に通うようになって、あるとき、乗換駅のホームで一人で電車を待っていたら、向かいのホームに彼がいて、じっと私を見つめていた。

彼はいったい何の用で、電車でどこへ行くんだろうか？……作男として親戚で働かされ、就職することも許されていなかった彼。それでもどこかへ行くのだろうか？

東京へ出て、ラーメン店で働いている彼と偶然出会う……などと、空想家の私は、そんなことを期待したが、それはもちろん実現しなかった。東京というところは、新潟の田舎とは違うのだ。東京は海、茨曾根などは池、である。池なら、泳いでいれば偶然知人と再会することもあるわけだが。

その後、五〇年近くたって、私は中学校の同級会に行ったが、そこで知ったのは、川村武はよそへ出て行ったきり、消息もなく、行方しれずであるということだけだった。

七 雪国を去る

さて、これまで話をすすめてきたが、新潟が雪国であることは、自明のこととして、あえて触れなかった。もちろん、茨曾根村も雪国の一部である。この村は、白根町と合併後、白根市となり、最近になってまた新潟市と合併して、新潟市の一部になった。なんでこう大きな都市になっていくのか、わからないが。新潟市から白根市を通って隣の燕市につなぐ私鉄、私たちの通勤通学になくってはならない路線だったその私鉄も、廃線になったというのに。

新潟の人たちは、何かあるとすぐ、東京に出ていく。月潟村の人たちだけでなく、皆、東京の方を見ている。

「おらも、暖かいところへ行って」と、理髪店のおかみさんが言う。「寒いと、雪のあるところは嫌だの」

子供の私には、わからなかった。雪国に育って、他のところを知らず、ここが当たり前のものと思っていた。他の地域は知らないのに、別に故郷脱出願望は持たなかった。

母は違っていた。母は東京生まれだし、成長してから新潟県で暮らしたが、父と共に雪国を脱出、東京近郊にいたのに、戦争が激しくなって、空襲に遭い、しかたなく新潟県に戻ってきたのだ。「おらも、暖かいところに行きてえて」というのが母の口癖だった。

雪の降らない、暖かい、豊かな文化の表日本、東京に行きたい……。

その願いは、私が高校生のとき、この地方を襲った大雪の日を過ぎて、強くなった。

その大雪の日、一晩に何メートルもの雪が降りつもった。まず、玄関から外に出るのに、雪かきをしなければどうにもならない。朝早く起きて、家族そろって雪かきをする。そして、どうにか電車の駅まで行ったが、電車は、当然、不通だった。

私たち高校生は、この日は、電車で登校できない。皆、駅に集まって、困ったが、「歩いて行こう」と男子たちが歩き始めた。

私たち女子も、その後に付いて行く。雪の中を、皆で、がんばって歩いて行く。このときは、楽しかった。

だが、三条市の学校に着いたら、教頭が校舎の周りを雪かきしていて、「今日は休校だ、早く帰りなさい」と私たちをうながした。

せっかく来たのに。また、元の道を逆戻り。

家に帰ったら、父が屋根の雪下ろしをしていた。

「ユリ子も手伝うか？」父に問われて、

「はいー」私も喜んで、雪と戦う。

このようなことが何回もあったら、私ももっと雪国嫌いになっただろうが、幸いこんな大雪はこのとき限りで、ただ楽しい思い出だけが残った。

だが、母は身体を痛めた。このとき雪下ろしを無理に手伝ったため、毎年冬になると、腰がずきずき痛くなる、と言っていた。

さて、新潟の大病院で医師をしていた叔父・秀介が、定年退職し、その退職金で暖かい千葉県の習志野というところに土地を買った。そこで、医院を開く。

ところが、医院を開業しても、肝心の患者が来ない。

父が笑って言った「千葉は暖かくて気候の良いところだから、病人もいないそうだ」。

習志野って、いいなあ、と叔父をうらやましがっていた父のところへ、吉報が届いた。否、それは直接父のところに来たのではないが。

父も、退職を控えていた。その勤め先の高校の同僚でやはり退職を控えていた後藤氏のもとへ、習志野の大学付属高校の教師の口が舞い込んだのだ。

後藤氏は、そんな遠くには行きたくない、と言う。喜んだ父が、「おれが行きたい」と立候補する。

これが成立して、私たち一家は、習志野に引っ越すことになった。といっても、その一年前に私は東京の大学に進学し、大学を卒業して東京の会社に就職していた姉と一緒に、都内に下宿していた。で、ここで千葉に移って父と合流。

当初、母と妹は、新潟に残った。当時母は新潟市内に勤めがあったし、妹は新潟市の高校に進学していた。

で、翌々年、一年浪人して妹も東京の大学に進学、数年後には母も千葉県の高校に転動できた。

雪の降らない関東は、幸せの里だった。ただ、ここにいたからとて、病気にならないわけではない。叔父・秀介の谷川医院も、少しずつ患者が来るようになった。人々は、初めは、叔父を知らなくて、患者が来なかったのだ。ロコミで叔父が名医であることがわかり、患者もしだいにふえていった。

ここで若干補足説明しておく、叔父秀介は、私の父より一歳年下だが、父より早く定年退職を迎えた。当時、新潟の教育界には、はっきりした定年制がなく、「勸奨退職」といって、適当な時期に教育庁が個々の教師に退職を促す。それに従って退職すると、退職金が倍もらえる。で、それに従わないと、後で退職するとき、退職金が少ない。父は、教育庁に従って、勸奨退職し、雪の降る新潟を棄てたのである。

八 日本海

郷里の茨曾根村は海辺ではなかったから、日本海というと、私の脳裏に浮かぶのは、村上瀨波温泉の海岸、そして新潟市の海岸である。

瀨波温泉の青空旅館は、母の実家だったので、私たちは毎年夏休みになると、父、母、姉妹の五人家族で、そこへ行って、すごしていた。

瀬波の海岸は、遠浅ではないので、海水浴にはあまり適していなかったが、とにかく海水浴場はあるにはあった。私はカナヅチで、泳ぎができなかったが、でも、砂浜は楽しかった。

防風林の松林は広く、大きく、良い散歩道だった。さわやかな風があたる松林や海岸にも、何軒か旅館が建っている。

水平線のかなたには、佐渡島が見える。

佐渡島……父と母とが出会った所である。

村上の女学校の教師だった父は、女学生を連れて佐渡に修学旅行に来ていた。女学生の中には、青空旅館の娘である母の妹もいた。

一方、村松という所の女学校に勤めていた母も、生徒たちを連れて佐渡に修学旅行に来ていた。で、偶然、同じ旅館に泊まる。

「先生、この人が私の姉です。お姉ちゃん、こちらが私の先生」と叔母が二人をひきあわせた。

で、この後、父からどんどん手紙が来るので、母もうれしくて、結婚する気になった。

しかし、父も母も、いつまでも雪国にいるつもりはなく、奈良へ転任。その後、東京へ……が、戦争があった。空襲されて、家族は再び新潟県に疎開する。そこにいついて、関東地方の千葉に来るまで十数年もかかった。

新潟市の海岸。波返しのコングリートブロックの積み上げられている無残な海岸。このあたりは、地盤沈下がすすんでいて、砂浜も削り取られていた。（これは私が大学生のとき、今から四十数年前に見たのだが、現在でもこの地盤沈下はすすんでいるという）

海岸を、私は高校が同期だった橋本雪子と歩いていた。雪子は新潟の大学で学び、市内に下宿していた。私は東京の大学だが、夏休みに雪子を訪ねて行ったのだ。

「おれ、小学校の先生になりてえて」と雪子は言う。「僻地の学校の教員になるんだ」

「僻地の？」

「うん、それがおらの夢」

「僻地ねえ」私は少し笑った。「お前さん、その考え、きつと変わるて」

そうなのだ。雪子は大学卒業後、確かに山奥の分教場の教員になったが、これは新任から数年間は僻地勤めするのが、この県教育界の慣わしで、当の雪子も、早く分教場を出て、町に移り、結婚したがっていた。

「僻地も都会も、教育には変わりないもん」と言うようになった。

茨曾根を出てから、約四五年。私は出身高校の東京同窓会に行き、そこで同じ中学から同じ高校に進学した田中啓太と会った。

「やあ、奇遇だなあ」と、啓太は感嘆。今度、中学の同級会があるんだ。光一くんが同級会、計画しているんで、お前さんのこと彼に言っておくさ。お前さんのことは、行方不明になっていたんだ。おらたちも、もう六〇代。こちらで同じ中学のやつらと旧交を温めるのも良いってものだ」

私たち新潟出身者は、東京に来ると標準語で話し、郷里に帰ると、自然に、お国ことばになる。また、同じ県出身者と話していると、これもついお国ことばになってしまう。

この年、私は新潟県の岩室温泉での同級会に出た。

稲の収穫が済んで、雪の降り始めるちよつと前、同級会の良い季節だ。中学を出てから、五〇年近くたって、もう、男も女も家庭では主人である。誰にも遠慮はいらない。いや、来られない人もいたのかもしれないが。

親友の稲子。中学を出るとき、希望の職種であったバスガールになれなくて、泣いていた。かわいそうに、と私は同情していたが、彼女も、今は大工の夫を支えて、自分は宅地建物取引業主任の資格を得て、働いている。

「いいんねえ、みんな、奥様方、のんきに幸せに暮らしているでねえの。おらばっかり貧乏くじ引いて、ずっと働いて、家計を支えてきて……うちの人は大工だけれど、仕事がない。私も楽しみたい」と稲子は嘆く。

「そんな、いいでないの、経済的に自立して、旦那を支えてきたんだすけ、誇りに思うていいのでねえけ？ 立派なことだねえの」

「みなさん、そうおっしゃいますけれどねえ」

「隣の芝生は青い」

「あ、まあねえ……」

稲子の人生にも、様々なことがあったのだろう。そういったいろいろなことを、ここでこれ以上書こうとするのは、やめるが、私のルーツが、中ノ口川のほとりの茨曾根であることにはかわりはない。このことを確認して、このお話は、ここで終わりにしておく。

参考文献

苗字と地名の由来事典 丹羽基二著 新人物往来社

アイヌ語辞典 菅野茂著 三省堂

日本地誌9 中部地方総論・新潟県 日本地誌研究所

二宮書店

角川日本地名大辞典15 新潟県

「角川日本地名大辞典」編纂委員会 竹内理三

角川書店